

# World Watching 162

ワールド・ウォッチング



針谷 雅幸

在フィリピン日本国大使館  
一等書記官



## 多様な産業が 集積する スービック港 米国海軍基地からの転換



### はじめに

首都マニラの北西約80kmに位置し、水深が深い内湾を有する天然の良港であるスービック港。主として軍港として利用されてきた港湾であるが、現在は、産業や観光の拠点として利用転換されている。その数奇な歴史と現況について紹介する。



### スービック港の歴史

スービック港の起源は1800年代に遡る。当時、フィリピンを支配していたスペインにより海軍基地として開発され、1898年の米西戦争終結までスペイン海軍の拠点として利用された。その後、フィリピンの支配が米国に移ってからも、引き続き海軍基地として利用され、独立（1946年）後も米比軍事基地協定に基づき、同港の北東約50kmのクラーク米空軍基地と一体的に米軍の拠点として利用されてきた。

しかし1992年、ピナトゥボ火山の大噴火に伴う火山灰等の堆積物の影響や、フィリピン上院議会による基地利用延長への強い反対により、スービック海軍基地とクラーク空軍基地はフィリピンに返還されることとなった。

返還後、基地転換・開発法（フィリピン共和国法第7227号）に基づき、スービック湾自由貿易港（SBF）及びスービック特別経済・自由貿易港地区（SSEFZ）の枠組みが定められ、これらを管理する組織として、スービック湾都市開発庁（SBMA）が設置された。

その後、SBMAは2000年代に円借款「スービック港湾開発計画」により既存施設のリハビリ、新規コンテナターミナル建設等を行い、現在の商用港とし



写真1 スービック港

て利用されるに至っている（なお、円借款「スービック港湾開発事業」の詳細については、本誌2006年3月号World Watchingに詳細がまとめられているので、参照願いたい）。



### 産業拠点としての発展

スービックは港湾と空港が近接しており、ロジスティクス拠点としての優位性があるほか、経済特区としての各種の税制優遇（法人税は5%に減免、関税・付加価値税等の免除、等）を活かし、多種多様な産業の誘致に成功しつつある。これまでにスービックに進出した代表的な企業について紹介する。

#### (1) 韓進重工社

韓進重工社は、2006年2月に現地法人（HHIC社）を設立し、スービックに進出。韓進グループとして、韓国に比べ人件費の安いフィリピンでの船舶建造にシフトを図っている。スービックには総額25億米ドルもの投資を宣言しており、70万坪の敷地の中には、容積45万トン及び22万トンのドライドック等を有する世界最大級の造船所となっている。同社は



写真2 HHIC社の造船所

フィリピンに存する民間企業でトップクラスの雇用者数（約21,000人）を誇り、2013年の輸出額19.61億ドルを目標に掲げる等、スービックの経済・雇用を大きく支える企業のひとつである。

なお、韓進重工以外にも常石造船、ケッペル（シンガポール）等も進出し、大規模造船所が運営されている。これらの企業進出により、フィリピンは2007年以降2011年まで世界第4位の建造量を誇るまでに成長した（2012年はブラジルに抜かれ第5位）。

### (2) Vale社

ブラジルの鉄鉱石大手であるVale社は、かつてブラジルから中国への鉄鉱石輸送のため、Valemax（40万DWT級）の投入を進めていた。

しかし、2012年2月に中国政府が安全上の問題や国内造船業の保護を理由に、35万DWT以上のバルカーの中国国内港湾の入港を規制したことから、これを契機に、同年3月にVale社はスービック港をアジア域内の鉄鉱石輸送のハブに位置づけ、鉄鉱石積替専用船をスービック港に投入した。これは、鉄鉱石積替専用船の一方の側舷にブラジルから鉄鉱石を運搬してきたValemaxを、もう一方の側舷に中国・日本・韓国に鉄鉱石を運搬するCapesize（20万DWT級）又はPanamax（7万DWT級）を横付けして積替えを行うものである。なお、SBMAは、同社に水域占有に係る料金を課すこととしたため、年間収入は約7,000万ペソ（約1億5,700万円）増加すると見込まれている。



写真3 鉄鉱石の積替えの様子  
(Antipodean Mariner Websiteより)

### (3) スービックテクノパーク

造船業・海運以外の産業もスービックには多数進出しており、例えば開発総面積約60haのスービック唯一の日系工業団地には、日本電産、三洋電機、日本セラミック、ウッドワン、日立オムロン等の企業が現地工場を設けている。このうち、三洋電機、ウッドワンは韓進重工に次いでスービックで2位、3位の輸出額を誇るなど、これら日系企業は地域経済に大きく貢献している。同テクノパークの開発用地は6ha程度しか残っておらず、SBMAは新たな日系工業団地の整備も検討している。あわせて、SBMAは円借款で整備したコンテナターミナルの利用促進に

も積極的に取り組んでおり、今後の新規航路開設とともに、さらなる製造業の投資が期待される。

その一方で、2012年以降、SBMAは進出企業に対して新たに土地共益費を設定するほか、進出企業がディベロッパー（工業団地）に支払う賃料の1割をSBMAの取り分として新たに徴収する旨通知する等、追加的な課徴金を設定した。土地共益費については訴訟手続き中である等、SBMAと進出企業との間で大きなトラブルとなっている。



### 環境拠点としての発展

自然が多く残され、優れた景観を有する内湾地区は、フィリピンの主要観光地のひとつとなっている。首都マニラからのアクセスも良いことから、マニラ在住者をターゲットとしたリゾートホテル、ヨットハーバー、ゴルフ場、テーマパーク（動物園・水族館）等が建設されており、宿泊する来訪客だけでも150万人（2012年実績）を計上している。



写真4 ヨットハーバー



### おわりに

本稿でまとめたように、スービックは地形上特性（大水深・静穏）、施設的特性（国際港の存在）、観光価値を武器に多種多様な産業の誘致に成功し、米国海軍基地からの転換に成功しつつある。本年6月には小野寺防衛大臣が、9月には山本内閣府特命担当大臣がスービックを訪問する等、主として利用転換の観点から日本側の関心も高まっている。

他方、企業誘致にあたって様々な問題（進出企業に対する追加的な課徴金請求に関する訴訟、コンテナターミナルへの新規航路誘致の必要性等）が生じていることに加え、米国が再度スービックを軍事拠点として活用する案を有しているなど、先行きが不透明な部分もある。

同港が有する多様な魅力を最大限に活かした企業誘致活動の成功を期待したい。

### 【参考資料】

HHIC社WebSite、日本財団「東南アジア地域における洋上貯・混炭施設としてのメガフロート活用可能性基礎調査」報告書、SBMA資料